慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済価値論管見 波多野鼎氏の近著「価値学説史」を読みて
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.1 (1931. 1) ,p.102- 117
JaLC DOI	10.14991/001.19310101-0102
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310101-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟價値論管見

波多野鼎氏の近著「價値學說史」を讀みて

永田清

本稿はもと新刊紹介の意味に於て草したものであるが、說くところ必ずしも波多野氏の著書に就てのみでなく、且つ價値論全體に對する卑見をも併せ述べた爲め、姑く前記の表題を課すことにした。讀者の寬恕を乞ふ次第である。

ジョン・スチュアアト・ミルは、一八四八年其の經濟學原理の初版に於て、「價値の法則に關しては幸にして今日若しくは將來の學者が解決すべき問題は幸にして一も存せぬ。この主題の理論は完全である」（註一）と公言して居る。こゝにミルの稱して完全となす價値論が生產費說たることは無論である。併し乍ら、斯るミルの言葉は文字通りに受容出來ぬ。蓋し生產費說其れ自體に對する批判は姑く措くとするも、事實上ミル以後に於る價値論究は跡を斷たず、例へば、限界利用學說の創唱と其の發展、勞働價値說其れ自身の深化と其の展開、或は折衷學說に於る多元論的歸結、且つ又、近時に於る價値論放棄說等の存在其れ自體が明らかにミルの自負を裏切つて居るからである。經濟學上に於ける價値論は、今日未だ確然たる解決を見ざる難問題の一つであらう。

然らば、斯る「價値觀の混沌」、その昏迷と紛糾とは何處より生じたるか。學說史的に謂へば、スミスが價値なる語を「使用上の價値」と「交換上の價値」と謂ふ二箇の異る意義に解したるときに始まる。スミス並にリカァドォに從へば、「前者はある特定物の效用を謂ひ表し、後者は其物の所有に由て取得する他貨物購買力を意味する。然るに、使用上の價値最も大なるものが交換上の價値を有することは僅少若しくは皆無なることが屢〻であり、又反對に、交換上の價値最も大なるものの使用上の價値が僅少なるか皆無なるかのことがある」（註二）。この「價値の二律背反」は、併し乍ら、スミスをもリカアドォをも惱ましなかつた。事實上、このことは、「價値なる言葉が二個の異なる意義を有す」と做すものには、何等の疑念をも惹き起さないからである（註三）。リカアドォは、この二律背反を引用することに由り反つて、效用が交換價値の尺度をなすものに非ずして單に必要なる前提條件を構成するにすぎぬと考へた。「效用は交換價値にとつて絕對的に欠く可らざるものではあるが、其の尺度ではない。若しも一貨物にして、如何にしても有用ならざるものであつたならば、――換言すれば、如何にしても吾人の滿足に寄與することを能はざるものであつたならば、……その物は全然交換價値を欠くであらう。既に效用を有するものとすれば、諸貨物の交換價値は二個の泉源より生ずる。即ち貨物の稀少性からと、これを取得せんが爲めに要する勞働量からとである。貨物の中には、……其稀少性のみに由て其價値の決定せらるゝものがある。……併し乍ら、此等の貨物は、日々市場に交換せらるゝ貨物大量中甚だ小なる一部分を構成するに過ぎぬ。欲求の對象たる諸財中の遙に最大なる部分を占むるものは、勞働によつて獲得せらるゝものであるから、貨物を論じ、其交換價値及び其相對價格を支配する諸法則を論ずるに當つては、常に人間の努力によつて其數量を增し得べく、且つその生產上に競爭の制限なく作用するが如き貨物のみを意味するものである」（註四）。

リカアドオは略〻以上の如き前提條件のもとに、「困難なる價値の問題」に就て「爲し得べき最善の考慮を盡し」、「綿密周到なる推敲を經て一層充分に之を說明せんと試みた」けれども、其研究は、彼れ自身の言を以てすれば、失敗に終つて居る。即ち屢〻引用せられるマルサス宛書簡（一八二三年八月十五日附）の一節に斯う述べて居る。「予の貴下に對する不平は、貴下が吾人に精確なる價値尺度を與へたと主張することに在る。予は此權利主張に反對して次のことを謂はふと思ふ――『予は成就し、貴下は失敗したと謂ふのではなくして、貴下も予も共に失敗した』と」（註五）。斯る失敗の原因は、勞働と利潤とに歸屬する比例の異同に關する困難に在る。同額の資本が必ずしも同量の勞働を雇傭せざるの現狀は、リカアドオの如く勞働價値と自然價格とを同時に理解せんとするものにとつては、困難なる材題を提供するものであり、且つその事自體が價値論を爾後益〻紛糾せしめた一原因と見て宜いであらう。

抑〻價値現象には價値を認むる主體と價値の認めらるゝ客體と其主客兩體との間に價値の認めらるゝ關係の存在とが必要である。即ち價値を認むる主體が一個の要求を持して對象に向ひ、其對象が其要求を充すに足るべき能性を有すと主體に認められ、而して評價主體の要求と其對象がこの要求を充たすこととの間に何等かの意義に於て一定の障礙あることを要する（註六）。英吉利正統學派の價値論は斯る客體を其研究對象とし、價値を以て直に交換價値と做した。然るに一八七〇年代に擡頭せる限界效用論者は、主體の心理的解剖より出發して交換價値の原因を究明せんとした。「正統學派は天才的炯眼を以て經濟法則を確立したが、遂に是を基礎とした統一的說明に到達しなかつたのは交換價値に注意を集中し、使用價値に就て檢覈を怠つたからである。即ち此點に正統學派の大なる欠陷が存する。現代の限界效用說は、吾人の幸福と財貨との關係に無數の差異が存し、此差異が、他人との交換關係に於て頗る重要となり來るの事實を提示する。斯くの如き論究に由て經濟理論のルネサンスは齎らされたのである（註七）。斯くて使用價値は限界の概念と結合して價値論上に新しき地位を確保した。然し、この限界效用說は、社會現象としての交換價値の原因論的說明たらんとするとき、大なる困難に遭遇するであらう。

尤も、この價値論は斯る困難を克服する爲めに近時特殊の發展を經つゝある。この展開と相並んで、又主觀論と客觀論との折衷が試みられた。マーシアルの價値論はその一例である。效用と費用とその孰れが果して價値を支配するかとの問に對して、彼れは其の孰れも單獨に價値を決定するものでない事を示す爲めに、此二者を鋏の双刃に喩えた。「價値が效用によつて支配されるか生產費によつて支配されるかを論ずるは、鋏の上刃が紙を截るか下刃が截るかを論ずるに等しからう。洵に一方の刃を動かさずして截斷を行つた場合、その截斷は他方の刃によつてなされたと不用意に言ひ放つて少しも差支ない、併しこの言葉は嚴密に謂へば精確でない。通俗なる說明以外、嚴密なる科學的說明には許すことが出來ないのである」（註八）。斯くして、この單なる比喩が示す通り、價値論は遂に一元的明確性の喪失に終つて居る。

斯る紛糾は他面價値論無用說を生むに到つた。經濟學上に於る價値論は正に危殆に瀕して居る。カッセルの如きは明らかに價値論の學理的價値を否定するものである（註九）。固より、斯る論者は價

値論が難解なるの故にこれを逃避するものではない。經濟學上價値論を說くことは、論理上不可能なことであつて、「價値の唯一原因を說くこと自體が、經濟現象に關する無知を暴露すること以外の何物でもない」（註一〇）と謂ふのである。

姑らく價値論無用說を其のまゝ認容するとしても、價値の規定を俟ずして如何に價格を、又諸分配概念を說明するかの問題は殘るであらう。況んや、この說に對する批判檢討を求むる者にとつては、從來の諸價値學說に對する充分なる理解を必要とする。

斯くして、價値論は、肯定的意義に於ても否定的意義に於ても、依然として理論經濟學の中心問題である。價値決定の原理は、經濟事象の本質的統一的把握を可能ならしめる。これ、經濟學が價値論を樞軸として展開し來れる所以である。

この故に、吾が理論經濟學界に於ても、近時、價値論に關する幾多の力作が著された。今假りに著書出版年月順を以て其の主なるものを列擧すれば、森耕二郎氏「リカアド價値論の研究」、堀經夫氏「リカアドウの價値論及び其の批判史」、小泉信三氏「リカアドオ研究」及び「リカアドオ『經濟及租稅原論』」（經濟學古典叢書）解題」、高田保馬氏「經濟學新講」（第二卷、價格の理論）、波多野鼎氏「價値學說史」全三卷等がある。

森教授の前掲書に就ては、本誌二十卷三號に內容全般に亘る精緻な紹介があるから、再び茲に繰り返さぬが、該書は「先進學者の研究の綿密なる涉獵に基づき、而かも其間幾多の獨創的なる工風の跡を示せる、リカアドオ研究者の看過すべからざる著作である（本誌二十二卷三號參看）。氏が價値論研究の發足に當つて先づリカアドオを其對象とせられたのは當を得て居る。「リカアドオは其價値論を以て單に商品交換の原理たらしむるにとゞまらず、經濟現象を本質的に規定するところの基本的關係の解明の指導原理となし、外見的諸運動と事實的諸運動との衝突矛盾は如何に相關聯するかを闡明せんとし、以て實踐的にして科學的なる彼れの經濟學を樹立したることは、洵に經濟科學に於ける彼れの偉大なる歷史的功績であると謂はねばならぬ。」彼れは「十九世紀の最も影響多き經濟學者であり、」從つて、「吾人の學問領域に於ける課題は他のものを以て彼れに代らしめることではなくて、彼れの思想を理解し、之を大成すること」だからである（註一一）。森教授はこの研究に於て結局次の如き結論に到達して居られる。「私は、彼れの修正あるに拘らず、彼れの價値論は依然として勞働價値論として殘り、その基礎に於てそれより離るゝことが出來なかつたと思ふと同時に、この二つの相矛盾せる態度を彼リカアドオに於て見出すことを否認するわけに行かぬのである。然らばこの彼れの勞働價値論に對する曖昧なる態度は一體何を意味するか、リカアドオが斯樣に彼れの勞働價値說の不十分なることを認めんとする態度と、それに執着せんとする態度との二つの態度をとつたのは、この態度を裏づける矛盾の現象をよく見得たによるものであつて、それはリカアドオの功績であるに拘らず、彼れはこの矛盾の現象を矛盾の現象として即ち資本家的生產方法の必然的現象として見、さうしてそれを彼れの價値論から說明することを爲さず、それを彼れの價値論の矛盾として遂にそれに一種の修正を加へるに至つたものである」と（該書五〇六—八頁參看）。この解釋は無論マルクスのリカアドオ批判を基礎とするものである。

等しく、リカアドオの價値論を研究對象とし、其勞働價値說はマルクスに至つて完成したと說くものに堀博士の大作前揭書がある。該書は二篇に分たれ、第一篇に於てはリカアドオの價値論及び價格論の分析、並びに斯論に對する批判の歷史が取扱はれ、第二篇に於ては勞賃論に就て同樣のことが做されて居る。解釋の主力は、結局、第一篇に注中せるものの如くであるが、其は事實そうならざるを得なかつたであらう。蓋し、第一篇は一般貨物の價値及び價格に關する理論であり、第二篇は單に特殊貨物としての勞働力の價値及び價格に關する理論にすぎぬからである。博士は結局リカアドオの價値論をどう解釋されるか。謂ふ——「リカアドウが勞働價値論を「修正」せざるを得ざるに至つたのは、彼れの與へたる種々の說明が如何なるものであるかを問はず、實は、資本主義社會の進步と共に益〻顯著となる所の利潤平均てふ實際の事實、即ち投下された全資本に對して計算さるゝ利潤の率が益〻平均して來るといふ事實の認識である。而して、彼れが其勞働價値「修正」論の一部をなすものだと看做して居る所の、勞賃の騰落に本づく價値の變動の容認は實は勞働價値論の修正を證明するものではなくて、勞働價値の「轉化」形態たる生產費若しくは生產價格に對する勞賃變動の影響を說明するものである」（該書五七一—二頁參看）と。博士に從へば、「マルクスは勞働價値說の完成者である。蓋し彼れはリカアドウの學說を十分に理解し、しかも正當なる論理を以てこれを發展せしめたからである。而して彼れの功績の中最も大なるものは、勞働價値より生產價格への「轉化」を論じて、リカアドウを眞に惱ました所の難點を解決したことである」（同五七七頁參看）と。

此等の解釋と正に好對照の地位をとるものに我小泉教授の「リカアドオ研究」がある。この書の出版は稍〻前二著に遲れて居る。然し、その例言にある如く、「リカアドオの價値論」の章は既に本誌十六卷二號より九號迄の間に發表せられたものであり、我國に於るリカアドオ價値論に關する最大の力作である。教授の「研究」はディール、ホランダアに比肩すべく、其は又リカアドオ研究者にとつてマルクスの「余剩價値學說史」と共に並び讀まるべきものである

以上の著書は皆リカアドオの價値論を中心とする學說史的研究であるが、高田博士の近刊書「經濟學新講」第二卷は、これ等と異つて、價値、價格理論の平面的基本的研究である。私は現在我が學界に於ける最大の原論書たる「新講」全卷の完成を俟つてその全般に亘る紹介を試み度いと思ふから、茲にこの卷の內容に及ぶ紹介をさし控へるであらう。唯だ博士が一般均衡理論と强力說とを結びつけられる論據に就ては充分に讀者の注意を促さねばならぬ。私は、既に本誌上に發表した二三の論文（註一二）に於て述べた通り、交換形式を中心として經濟現象を分析すれば結局平衡論に到達するし、而して其は最も精確なる需要供給の法則であるから、嚴密なる意義に於る價値本質論とはならなくなるであらうと思ふ。素より價値論は社會的なる價格現象の因果論的說明となり得る意味に於て肯めて存在の理由をもつものである。從つて價格現象を社會的綜合現象と看、一切の個別的部分的游離方法を避けて價格生成の發展過程を綜合的に靜觀し、且つ價値其れ自體の現象的分析に由て其の生成を充分に說明し得ると做すものには、價格論は不必要であり、且つ不可能事に屬する。YがXの函數なる時、其Yの一々の點はXの函數に由て定められる進行の原理を表す。これを示すものが即

ち微分係數であつて、其はYなる變數の生成發展の原理をXの函數を用ひて規定するものに外ならない。函數の表す變數Yの進行の理由は、其の個々の點に於る進行の方法を $\frac{dy}{dx}$ に由り表さしめる。變數Yは微分係數 $\frac{dy}{dx}$ の示す生成の原理を荷ふ數位の綜合に由て生成せられるのである（註一三）。この故に、同時的決定の函數論的規定を核心とする一般均衡の理論と所謂繼續的因果論としての價値論とは兩立し難きものとなるであらう。

以上の諸書は皆價値論研究者の必ず逸すべからざる力作であるが、更にこれ等の文獻に波多野教授の「價値學說史」全三卷が加へられた。教授の「價値學說順禮」は、第三卷折衷學派の價値學說の完成によつて、「略〻一つの重要なコースを終り得た」やうである。

第一卷は正統學派の價値學說研究であつて、スミス、リカアド及びマルサス＝ミルの三章に分たれて居る。然し、頁數を費すことの最も大なる點から看て、又論述の最も精彩に富めることから謂つて、主力を注がれのは第二章リカアドの價値學說であらう。それはそうならざるを得ない理由がある。素よりスミスの價値論は其自體研究の價値を有する。例へば、スミスが社會發達の段階を、資本の蓄積並に土地の占有未だ行はれざる初期草昧の社會とその既に行はれたる後の社會とに分ち、それに應じて二元の價値法則を樹てたる意味、從つて生ずるスミス價値說に於る眞意の曖昧、或はその價値論と地代論との矛盾の指摘等はスミス價値論の解釋として重要なるものである。併し乍ら、スミスの半途彷徨はリカアドオによつて一往整理せられた。即ち價値學說史上から謂へば、スミス價値論はリカアドオに於るその思索の出發點となつたと謂ふ意味に於てのみ最も大なる存在の理由をもつものである。マルサスに至つては、假にド・クインシイの痛擊を受容せずとするも、其の支配勞働說はスミスの文明社會に於る價値法則を單に繼承したるにすぎず、特にシニオア、ジョン・スチュアアト・ミルは、リカアドオの時間なる要素をより明瞭なる言辭を用ひて之を現し、自然價格の說明を益〻生產費說へ轉向せしめたにすぎぬと謂ふべきであらう。斯くして、この第三卷は結局、小泉、堀、森諸教授の研究と同一問題を對象とする點に於て特殊の興味を惹くのである。

先づ問題となるのはリカアドオに於ける價値概念の意味である。ディールはリカアドオに於る眞の價値概念が相對價値なる所以を次の如く說く——「リカアドオの語法嚴密ならざる爲め、多くの不明瞭を招いて居る。然し、其の解釋に就ては何等の疑がない。彼れが「眞實價値」或は「不變價値」を論ずる場合も、彼れの價値概念は常に「相對價値」の意味である。即ち財貨Aが他の財貨と比較して幾許の價値を示すかを說明せんと欲したのであつて、Aが其れ自體幾許の價値を表現し、若しくは含有するかを說明せんとしたのではない」（註一四）と。小泉教授の解釋はディールの斯る說明に反する。曰く——「固よりリカアドオの詳論するところが相對價値に在つて、絕對價値でなかつたことは勿論であるが、併し絕對價値の觀念が全然彼れの念頭に存することなかりしを斷言するは稍〻過ぎたるを覺える。上記の引用句に照して、彼れの相對價値論の底に稍々茫漠たる一種の絕對價値論があつたものと解するは決して不當と許すべきでない。たゞ絕對價値を論じて、一定量勞働の體現せられた貨物は、其自體單獨に一定額の價値を有すと主張せんが爲めには、先づ異種の勞働を一の標準勞働に約元して、その一定量を以て直ちに一定額の價値を生み或は含むものとなさねばなら

ぬが、リカアドオは輕くこの問題の表面に觸れて通過したから、彼れの絶對價値論は遂に成形發展する基礎を得ずして終つたと謂ふべきである」（註一五）と。

この點に關する波多野教授の結論を茲に摘記すれば斯うである。「相對價値の究明をその課題とするリカアドは、當然に、眞實價値の究明にまで進まなければならぬ、そして眞實價値を究明せんとすれば、異質勞働の等質化をなさねばならぬ。けれども異質勞働の等質化はリカアドオにとりては不可能であつた。そこで彼れは異質勞働の問題が迫り來るときには、自己の課題が相對價値に在ることを宣明することによつて難關を避ける。けれども相對價値は眞實價値の表現に外ならぬから、彼れは眞實價値を考察圏外に驅逐することを宣言しながらも、常にそれを前提としてゐるのである、爾かせざるを得なかつたのである」（該書一〇六頁）と。リカアドオに於る語法の不明確と價値概念の漠然性を最初に指摘せる者はサミエル・ベエリイであつた（註一六）。而して勞働の價値なる分析に就ては、吾人は之をマルクスに學ばねばならぬであらう。

次にリカアドオに於ける勞働價値說の「修正」なる問題がある、波多野教授に從へば、「リカアドオは勞働價値と自然價格とを明確に區別して把持することが出來なかつた」（該書一四七頁）。この差異は「個別利潤と平均利潤との差異である。この差異は理論的には極めて重大なる差異であると謂はねばならぬ。然るにリカアドはこれを明確にすることが出來ず、利潤の本質をもつて商品價値の分解部分であるとの見地に徹底しえずして、市場提供に要する時間の長短に應じて配當されたる『余剩』をも、分解部分としての利潤と同一視してゐたために、勞働價値と自然價格との異同を明かにすることが出來ず、從つてまた、その價値法則修正論の意義を的確に把握してこれを發展せしめることが出來なかつたのである」（該書一四八―九頁）。無論この解釋は新奇なものとは謂へぬし、且つその價値態樣も委曲を盡したものと謂へぬ。蓋しこの問題は當然マルクスの勞働價値其自體の分析解明と結びつけて論ぜらるべきだからである。然しこの問題をリカアドオに於ける生產費なる概念の漠然性及び、分配配論上の諸概念との連繫に於て一層明確に解かれたるは示唆に富むものと謂はねばならぬ。惟ふに、商品價値の分析は單なる交換上の形式からのみ說き得るものに非ずして、當然、生產並に分配の諸概念と結びつかねばならぬからである。

リカアドオの價値論を以上の如く解釋すれば、ミルの價値論に對する次の如き批判は當然生起し來るものである。「商品の價値は貨銀と利潤とをその內容とする生產費によつて規制される、それは兩者の機械的な合計である。然し他方において、勞働の費用と利潤とは有機的關係を保つ。商品價値は一個の有機的全體であり、利潤と勞働の費用とはその分解部分である。それならば、先づ商品の價値が與へられねばならぬではないか。こゝに吾々はスミスにおける困惑說に再會する」（該書三二九頁）と。

第二卷は墺國學派の價値學說であり、メンガー、ウィーザー、及びボェーム・バヴェルクの三者に於ける價値價格論の理解と批判とに充てられて居る。立論の意圖は、假りに、ボェーム・バヴェルクが謂ふやうに、正統學派はその勞働價値說においては「事實のスキラ」に當つて碎け、その費用學說においては「明白なる說明循環のカリブディス」の中に陷らざるを得なかつたとするも、果して

墺國學派其れ自體の限界利用説が完全に循環論理から逃れ得たかどうかを明らかにするに在るであらう（第二卷一三頁參看）。

限界利用説が孤立經濟において發見された價値法則であることは明らかである。然らばこの法則が交易經濟においても妥當するや否や、或はまた、交易なる契機の介入にも拘らず妥當するや否やは墺國學派價値論の試金石である。又事實上、限界利用説に對する批判をこの點に向けることは最も容易である（註一七）。然しこの論者の如く、人間社會の複雜なる關係を一個の與へられたる全體性と看ず、個人の單なる集會として Nebeneinander の關係に於て理解するものにとつてはこのことは問題にならぬ。これ、限界利用説が原子論的と稱せられる所以である。素、限界利用説はこの原子論的考察と條件の變化を許さゞる所與の設定とを前提とする。然るに價値論は個人の評價過程のみの説明では不充分である。否寧ろ何等かの意味に於て價格の原因論的説明となることが必要である。事實上、限界利用説はこの價格現象の本質的把握を目的とする。併し乍ら、この説は社會的價格現象を究明せんとすれば、結局、論理上の過程に於てある種の價格概念を豫想しなければならなくなる（註一八）。この故に波多野教授が「彼れ等の全理論は循環論に陷つてゐる。而してこのことは、交易經濟における價格現象が問題たるかぎり――そして經濟學においてはこれのみが問題であるが――個人の欲望と彼れの消費財との關聯が即ち限界利用が、價格現象の『終點』でもなく、またその『根源』でもないことを立證するものである」（二卷三〇四頁）と謂はれるのはこの意味に於て正しい。現にアモンが「價値構成の問題に於ける個々の事柄に關しては、限界利用學説の中に於ても亦種々の異説が存する。即ちある一部のものは、利用並に限界利用を數學的に計量し得と謂ふ誤れる思想を基礎として居る。然し、價値構成の正しき理解は次の事實の認識に基くものである。即ち種々なる財の價値は孤立的に併存するものでなく、且つ獨立に各々別々に形成せらるゝものでもない。一つの全體として構成せられ、全體として變動する價値體系の大なる相互依存關係に於て存在するものである」（註一九）と謂つて居るのは、限界利用論者内部に於て既に、游離的概念としての限界利用説が支持し得なくなつた所以を明示するものと謂へやう。

今姑く前記二卷の主題たる正統學派の價値學説と墺國學説のそれとが正しいものとすれば、吾々は果して其孰れを採るべきであるか。この問に對する一つの解答としてマーシャル、ディーツェル等の折衷論がある。波多野教授が第三卷に折衷學派の價値學説を説かれたるはこの意味に於てであらう。

この卷に於て「ディーツェルはその方法論に於て利用學派と全然同一の立場に立つものであり、」而してその折衷論の中心點が「費用概念の主觀的規定にある」（第三卷四七―八）と謂ふ結論と、「マアシャルの努力はむしろ利用學説の支配に對する對抗にその目標が置かれ、」「價値及び價格理論における生産の契機の重要性を力説する點に於て正統學派の傳統が彼の中に生きて居る」（第三卷二二五―六）との論斷とは充分注目に價する。併し乍ら、個人的な揣摩を許さるゝならば、著者は、折衷論者に通有な漠然性の爲めに、前記二卷に於ける如き興味を一部失はれたるものの如くである。些か極言の嫌はあるが、事實上、折衷論者は恐らく半途彷徨の評語を避け得ぬものであらう。マアシャ

ルは鋏の例を以て折衷の必要を說いて居るが其は單なる比喩以外の何物でもない。私は、既に前述した樣に、交換の形式から經濟現象を分析すれは結局一般的平衡の理論に到達するであらうと思ふ。從つてマアシャルの部分均衡の理論はその中途に停止せる不徹底なものではあるまいか。

全卷三冊通計千頁に亞んとする波多野敎授の價値學說史はこの折衷論を以て終つて居るが、經濟學上に於ける價値論究は無論是を以て總べてを盡したものとは謂へぬ。例へば、價値論全體の放棄を主張する價値說無用論、前記の平衡學說、並に勞働價値說の深化形態としてのマルクス價値論の分析等が擧げられる。此等價値論の解說並に批判が前記三卷に更に加へらるゝならば、敎授の力作は價値論に關する無類の大著となるであらう。

（昭和五年十一月十日稿）

（註　一）J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by Ashley, 1920 p. 436.

（註　二）A. Smith, The Wealth of Nations, edited by E. Cannan vol. I, p. 30.

（註　三）A. Amonn, Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, Ss. 7-8.

（註　四）Ricardo, Principle, of Political Economy, McCulloch edition pp. 7-10.　小泉敎授譯岩波文庫版八頁參看。

（註　五）Bonar, Letters of Ricardo to Malthus, p. 237.

（註　六）左右田喜一郎氏「經濟哲學の諸問題」一九五頁。

（註　七）Böhm-Bawerk, Gesammelte Schriften, Ss. 209-229. 參看。

（註　八）A. Marshall, Principles of Economics, p. 348. 大塚氏譯（書分冊三）五四頁。

（註　九）詳細は拙稿「價値論と平衡論」（本誌二十二卷十號一七六—八頁）及び「ソルラスとカッセル」（本誌二十三卷十一號）參照。

（註一〇）V. Pareto, Manuel d'économie politique, p. 246.

（註一一）小泉敎授「リカアドオ研究」序文參看。

（註一二）前揭拙稿「價値論と平衡論」及び「ソルラスとカッセル」等。

（註一三）拙稿「價値論と平衡論」一七〇頁參看。

（註一四）K. Diehl, Sozialwissenschaftliche Erleuterungen zu David Ricardos Grundsetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, S. 24.

（註一五）小泉敎授「リカアドオ研究」一三四頁。

（註一六）詳細は拙稿「サミュエル・ゲヒリイのリカアドオ批判」（本誌二十三卷一號）參照。

（註一七）Bucharin, Die politische Oekonomie des Rentners, S. 88. 參看。

（註一八）拙稿「ローザンヌ學派創設者レオン・ソルラス」後段參照。

（註一九）A. Amonn, Grundzuge der Volkswohlstandslehre I, Ss. 133-4. 前揭拙稿「價値論と平衡論」二一六—七頁參看。